

今回でこの連載は最終回である。これまで、仙台で活動している「心の相談室」について紹介してきた。もちろん、他にもたくさんの方の宗教団体や宗教者がガレキの撤去や炊き出し、傾聴活動、各種イベントの開催など様々な活動を展開してきたし、今も継続している。しかし、それらについて網羅的にここで紹介できるわけではない。ここでは、多少なりともその活動やそれに関わっている人たちについて個人的に知っている「心の相談室」の活動とその現状について改めて振り返ることにしたい。

「心の相談室」は宗教・宗派を越えた宗教者と医療関係者、宗教学者の協力によって東日本大震災の被災者に心のケアを提供することを目的に活動してきた。『中外日報』の北村敏康氏はその著書において、「供養・慰霊や傾聴、そして各種の相談から啓発活動、人材育成事業にまで広がる超教派の『心の相談室』の取り組みは、この震災でさまざまに議論されている『心のケア』と『宗教の力』をめぐる画期的で壮大な実験とも言える」（北村敏康『苦縁』徳間書店、262頁）と述べて、特殊な試みであることを記している。

具体的な活動としては、これまでに紹介してきたように、甲い、電話相談、カフェ・デ・モンク、ラジオ版カフェ・デ・モンク、講演会やシンポジウムの開催、臨床宗教師養成を行ってきた。

この団体の活動のきっかけにもなり、変わらず続けられてきたのは甲いである。震災発生後から毎月11日に、引き取り手のない身元不明者のために仙台市営葛岡墓園において甲いの儀式が行われてきた。現在では同墓園で管理されている身元不明の遺骨は4名分のみとなったが、毎月各宗教の持ち回りで追悼の祈りが捧げられている（高橋原『『心の相談室』の活動と臨床宗教師構想』『宗教と現代がわかる本2014』平凡社、44頁）。

新生「心の相談室」発足とともにはじめられた電話相談は、当初の相談件数は多くなかったが、FM仙台でのラジオ版カフェ・デ・モンクや『河北新報』での告知によって、件数が増え「担当する宗教者の確保が難しいという状態」にもなった。しかし、相談者が必ずしも被災者でなかったり、資金援助が一段落したことを勘案して、電話相談は現在では終了している（前掲書、45頁）。

移動傾聴喫茶「カフェ・デ・モンク」はメディアでも取り上げられて有名になったが、現在では開催頻度がやや少なくなっている。一時期は月6回程度開催されていたが、このところは月2回ずつ開催している。また、被災地へのメッセージを届けてきたラジオ版カフェ・デ・モンクも今年の3月で終了した。

こうした現状について、東北大学の実践宗教学寄附講座の高橋原准教授は「『心の相談室』は一定の役割を終えつつあるのを見てとれる」と評価している（前掲書、45頁）。しかし、被災地支援の必要性がなくなってきたわけではない。同講座の谷山洋三准教授は「被災地では今後、数十年間にわたって専門的な心のケアが必要であり、それは極めて地域性があるため、外部から長期の支援を受けるのは現実的ではない」と述べる（北村『苦縁』339頁）。したがって、当該地域において長期的に被災者のケアにあたることのできる人材が必要だというわけである。また、災害はいつどこで起こるとも分からないことや、災害だけでなく超高齢・多死社会においても心のケアの問題は

ますます重要になることから、臨床宗教師養成プロジェクトが充実し、全国的に展開してきている。

宗教者であることの意義

東日本大震災における宗教者の支援について取材してきた北村氏は、「それではなぜ宗教者なのか。彼ら僧侶や信仰者たちは支援活動に走る際、『宗教者として』ではなく『人間として行った』と語った」と言い、さらに「その行いをする心の奥底に、身についた信仰があったのだ」と分析している（前掲書、402頁）。しかし、「心の相談室」の活動を振り返ってみると、むしろ宗教者であることに重きを置き、宗教者として何が出来るのかという問題を模索してきたように見える。したがって、この支援活動の当事者が、宗教者であることの意義をどのように考えているかを概観してまとめにしたい。

まず、「心の相談室」発足時の室長である岡部健氏は、長く末期患者の在宅ホスピス推進に関わってきた医師の立場から、「もともとその現場で、医療者だけでなく宗教者の関与が要請されていた」と言う。その思いは震災を通してさらに強固になり、「これだけの災害の前では、もう宗教しなくなり、その『救い』が欲しい」と宗教に独自の意義を見出している（前掲書、265～266頁）。それは、「死後」の道標を提供できるということだという。岡部室長亡き後、室長を務める鈴木岩弓教授も同様の点を指して、「全てのケア活動の根底には愛する人を一瞬にして失ったり自ら死に直面した人たちに対して救いの光を示すことができるのは、あの世のメッセンジャーとしての宗教者以外にはないという確信があります」（前掲書、264頁）と述べている。

カフェ・デ・モンクなど現場で活動する金田諦應氏は、「いのちや自然への畏怖が宗教の原点。個々の教派の教義や垣根などは、この現場では無意味で、救いを必要とする人々に宗教者が生身でぶつかるしかない」と言い、また、「皆さんに『何とか生きていかねば』という気を起こしてもらおうこと。失ったものを自分の人生の中にきちんと位置付け、自分の価値観で前を向けるよう一緒に考えること。それが坊さんとしての大きな仕事です」と自身の活動を捉えている（前掲書、275～277頁）。

宗教は異なるものの金田氏とともに現場で活動してきて、室長補佐を務める川上直哉牧師は、「宗教とはどんなものか」という問いに、「目に見えないものを見せること。儀礼をすること。そして帰属先である共同体をつくり維持することで、その帰属している人を支えること」と明確に答える（前掲書、287頁）。さらに川上氏は「宗教者は神様や仏様の存在に支えられて、絶望に抵抗して希望を語るができる。その強みは『合理的な論理や科学的確率に依らずに安心・平安を宣言することができる』という点にあります」（前掲書、349頁）と宗教者独自の強みについて語る。

もちろん、それぞれに考えがあり一様とは言えないが、共通する点もある。それは、失われた命、失われたもの、目に見えないものを扱うという点において、宗教者に独自の役割があるということであろう。その作法や考え方は各宗教・宗派によって異なるが、そこに可能性を求めて「『心のケア』と『宗教の力』をめぐる画期的で壮大な実験」は続けられている。